



民間格致問答

六

二枚  
10/6



100  
6

學  
校  
書  
庫

門  
191  
6  
卷

民間格致問答卷之六

千八百三十一年發行

西肥佐嘉

三  
八  
日  
辰  
卯

大庭  
志  
景德

第十二回の講釋

○トインマに日の暮るを待ちねて早く且那の字  
又來りて彼此話する聲の聞えければ

且番頭でいるいふ汝ハそこ來て居るやそれハ神妙  
るトや乃公の講釋と聞との為は汝が甚好であるを  
を乃公が目撃さナゼトバさう久しく汝を待ざりて  
まご暗處に坐て居るくらトや然し乃公が直に光明を

民間格致問答  
卷之六

呼であらう。と云て且那が熟ある火を點の蠟燭を西の  
 持て來る。トイン。ア。これハ。キツ不思議でござり  
 まも且那暗處くら倏忽に參りませれば。眼が甚羞明う  
 ござりまして速り。ハ何にも見る。ハ出來ませぬ。こ  
 れハキツどう云訳でござりませ。やうり。且サウ汝は  
 ハ如何と思ふ。汝が最前來の時分。ハそこ。何欠  
 てあつたり。今でハそこ。何が來たり。トイン。ハ  
 最前ハ光り。がござりませ。今でハそこ。光りがご  
 ざりませ。のトヤ。且實さ様トヤ。汝が羞明がる所の事  
 の原因ハ遠く求むる。ハ及ぬ。光りが當然。羞明がら

せぬ。ばるらぬ。サテそれが何事を示もぞト云バ。光りが  
 汝の眼を羞明がらせて。汝の眼が始ハ都合よく見  
 為。光りの方。向ね。ば。ならぬ。ハ。汝の眼を刺衝。ト  
 ヤ。汝が知。り。り。何。でも。我等の五神を侵も。所の諸物  
 ハ。素質で。わり。體。である。もの。トヤ。故。ソ。コ。デ。光り。も。一  
 種の素質と名。く。トヤ。最前。汝。が。入。來。る。時。分。ハ。汝。が  
 殆ど。何。も。見。ハ。得。な。い。と。そ。こ。ハ。光り。が。あ。れ。ば。汝。が。諸  
 物。を。見。る。トヤ。ソ。コ。光り。ハ。我等の周圍の物體を。我等  
 見。知。る。素質。で。あ。る。トヤ。この素質ハ。格。段。る。もの。多。分  
 が。あ。る。トヤ。獨。工。夫。し。て。乃。公。が。今。其。事。を。拘。り。つ。て。汝。が

講釋もろでわらう所の事就て聞よ

○光りと云もの、我等の眼球に作用を為す我等を暗處  
 々ら清明な状態にまで移行しめて我等の周囲の物體を  
 明らな為す所の力所及の想像に越す極精微なる素質で  
 ろるトヤ此素質ハ物體の間と我等の眼球の間とであつ  
 て實に眼球の上は作用ものトヤ眼の衰弱き病人は甚  
 感覺べくさへ作用トヤ何故にこの病人もまた光りの刺  
 衝る為す眼を閉て暗處に保とねがらぬ  
 ○然し此素質ハ如何なるものであるぞト云バ實らしく温  
 素の効験であるトヤナゼトバ光りと温暖とハ毎度併

行て彼ら此が出来ものトヤうらトヤモコハ口乃公  
 が火筋を熾紅まで火の中置バ此火筋が始は只熱く  
 まりて暗處に見られ得るとるト温暖の線條を自ら  
 發るトヤ然らるが熾紅まで進る所ハ暗處に於て見  
 らるべくなりて温暖の線條の他はまた光線と發して次  
 第は温暖を積高むれば温素が光りまで移替り得る  
 程のものトヤこの他は我等が光りの性質に就て識ぬ  
 トヤ然しながらそれが物體の上は作用て其物體を溶解  
 し其部分を緩柔て已れ自らと混和しむるトヤ別してハ  
 木や草の葉やまとの他の部分に含する硬氣と混和して植

物の培養まで炭素を分離して清氣を天空に返らさるる  
 何故に日輪の光りハその失ふところ清氣を天空に歸  
 する為のさ様は強く作用ものぞや草木がその色を変せて  
 光りのない處は緑色の葉の代り黄色と現はるるハ  
 まことそこらであるトや汝が失格列の藥草は於て見る  
 通り此を黄色は為すの爲ハ氣をつけて暗處に置ね  
 ばならぬらトやまこと光りのない處は長く生計を營ま  
 ねばならぬ時ハ人倫や活物が病者ものとなるトや其他  
 極精微なる流動物の此光素が天地の中は散満充實  
 して日輪や恒星々ら分離さるるトや然らば光素が

日輪は由てハ運動するては拘りて寡ひところが光素  
 を光明として知得て物體を見得る程は營むトや假令  
 我等が光りを温素の一種として目撃し雖も此素質ハ  
 天空氣と混和するもの他ハ然らば温暖を出さぬ  
 と見ゆるナレバ乃公が汝は話を通り空気は甚稀薄く  
 ある高山の絶頂ハ始終日輪から照されてそれが為  
 イツモ雪を以て覆れてあるらトや空氣が甚稠厚ある  
 所の土地は低くなればるるや日輪の光りが反射由  
 て誘れて温暖を引起すトや  
 ○光りハ我等は物體の形を知るのさるらむと差異

の色を知らざるトヤ、各個の光線ハ虹ニ於て見る差異の色  
 ちら成立りの様に見える則ち淡碧トヤの洋靛トヤの藍  
 トヤの緑トヤの黄トヤの黄丹トヤの紅トヤのよりてこ  
 の色ハ三角ニ磨る硝子鏡を透して光線と各個に分る  
 時ハ甚明ク見らるトヤ、乃公ガ茲ニ介様ニ眼鏡を持  
 て居るトヤ、サこれを持ってチツト見透して見よ 「トイ  
 ハーこれハ立派ニ見えませ私ガこれを持って見ませる物  
 體ハ皆ガ虹の色ガござりませ、これハキツドウ云もので  
 ござりませ、且那私ニ少一バツリ言て下さるご心切ハ  
 ござりませ、まいり 「且オ、汝ガこれを持って昼見こるら

バ、まごく餘慶ニ美麗クあるトヤ、若暗箱の中ニ日輪ニ向  
 みて板ニ小穴を穿て日光線を通貫せてこの三角硝子鏡  
 鏡ニ三角體の真平面ニ日光の線ガ抗る不トニ様ニそれバ、  
 その日光線ガ壁や屋蓋ニ抗て乃公ガタイツタ名けニ色を  
 分ちて現ハるトヤ、ツデコ各個の光りの束把ハ各々各個  
 の色をもつて七ツの線條ニ聚合され、トガ明リニある  
 トヤ、サテ我等ガ先をやらう  
 ○光リハ何處までも充滿てあるとして觀せねバならぬ  
 然しるガラ入用ニある所ニハ光る體ニ由て作用の中ニ  
 誘れぬ、ハるらぬ、日輪や或ハ火把や蠟燭や手燭などの炎

がある通り、この作用ハ試験ニ由テ、是の如くなる事ガ  
 明ク又あるトヤ、サテ物體ガ照さるゝと、その色ハ、その物體  
 の諸點、四方八方、その一點の色を、出クモ、光線ガ反  
 射さるゝトヤ、モ、コ、ハ、口、日、の、光、り、う、ま、と、ハ、他、の、光、り、よ、て  
 照されてある家や他の物體ガ、蠟燭であるウの、様ニ各點  
 くら四方八方、直線、よ、て、光線、を、分、離、を、と、目、撃、ね、バ、方、ら  
 ぬ、然、る、時、暗、處、ニ、於、て、それ、又、向、て、現、ハ、る、れ、バ、その、色、の、あ  
 る、各、點、ガ、白、壁、や、白、羅、紗、や、ま、と、白、紙、ニ、現、ハ、る、ト、ヤ、チ、ヨ  
 ト、汝、又、想像、て、見、よ、昼、ニ、於、て、此、箱、ガ、全、く、暗、く、し、て、此、板、ニ  
 ある、穴、ガ、錢、の、大、さ、ど、け、ニ、し、て、ま、と、その、穴、ニ、向、ふ、て、四、弗、

ト、多、ク、五、弗、多、の、距、離、ニ、て、白、羅、紗、ガ、張、て、あ、る、時、ハ、そ、こ、ニ  
 何、事、ガ、出、來、る、で、あ、ら、う、ウ、ま、と、一、く、此、事、ト、ヤ、箱、板、ニ、真、向  
 ニ、相、對、ひ、て、立、汝、の、家、ウ、その、家、ニ、想像、ベ、ク、あ、る、諸、點、り、ら  
 蠟、燭、の、通、り、ニ、幾、何、や、ど、り、の、光、線、ガ、此、板、の、穴、を、透、り、て、十  
 字、形、ニ、交、叉、し、て、各、個、の、線、ガ、こ、の、白、羅、紗、ニ、抗、り、止、り、て、分  
 離、れ、る、で、あ、ら、う、汝、の、家、の、軒、の、黄、色、ニ、線、ハ、皆、羅、紗、の、上、ニ  
 ム、亦、黄、色、ニ、見、也、る、で、あ、ら、う、緑、色、の、屋、蓋、の、色、ハ、ま、と、緑、色  
 ニ、赤、色、の、石、の、色、ハ、ま、と、赤、色、ニ、白、き、接、際、の、色、ハ、白、色、ニ、あ  
 る、ま、ど、ニ、見、え、て、汝、の、家、の、その、色、ガ、皆、十、分、ニ、羅、紗、の、上、ニ  
 そ、こ、ニ、画、師、ガ、あ、り、し、う、の、様、ニ、繪、ど、ら、る、ト、で、あ、ら、う、他、の

物體の皆も亦その通りトヤ。この穴を透る線條が至小バ  
 かり混雜して現ハるゝものトヤ故也。そこは凸は磨、眼  
 鏡を置いてこれを助るトヤ。然る時ハ羅紗がその一點は向  
 ふてある程は置ねハみらぬトヤ。此硝子鏡ハ皆の線條を  
 焼點と名くる處は一緒に聚合る様ももるトヤ。これハ  
 我等が詳しく論ぶるであらう所のものトヤ。此態は於て  
 ハ眼鏡の大きだけの穴が拵へらるゝ。ソレ然る時汝の家  
 や樹木などが極精微は画圖して、功者ある画師も及バぬ  
 程の皆のその色を以て、明らにして分明は現ハもトヤ。光  
 りの此作用をバ暗箱と名け、通常の語は佛良の言を以て、

暗室と名くるトヤ

○此式はて光りが色を定るを考へるを出来る日輪  
 や火炎の光りが物體は來りて、幾分だけ反射さるゝト  
 や全き光線ハ物體の為は吸込れて、そこは何れも反射さ  
 れぬトヤ。ツゴ一ツも色がなくして物體が黒くあるトヤ。そ  
 れと違ふて皆の光線が反射されて吸込るゝてがるハ時  
 又ハその物ハ白くあるトヤ。然し乃公ク夕イマ言と通り  
 又七ツの頭色くら成立光線の赤き部分ばかり反射さるれ  
 バ。その物ハ赤くある黄色は部分が反射さるれば。物體ハ  
 黄色もあるとよして錯雜する色ハ反射さるゝ光線の



混和ふも由て起されるトヤ。それ故に染るもや採色も  
 るも色を起す所のその光線バウリ反射する素質をそ  
 こに塗るらでハなんも他でハるい。モコハ口物を青  
 色に採色しやうと思ふ時ハその青色のある光りの其  
 線條バウリ反射する一個の素質をそこを塗るトヤ  
 ○今論トする暗箱に就ての試験が物體の線條をその焼  
 點の硝子の一點に於て凸磨する硝子鏡を備へ  
 る紙に映り差異の光りの色を投與へるを我等は示す  
 の他はまた日輪を由て照さるゝ黒き色ハその線條を吸  
 込で白色ハそれを反射するを我等は検査が習ハる

トヤ。ナレバ黒き塚杭ハ日の光りも於て焼く様も熱くる  
 るらトヤ。白色ハ些少の温暖を覺えて日の光りも由て  
 起る再往の反射の熱を覺えるの。トイレヘイ且那私  
 ハ屢く發明いし。殊ハ炎熱の日光の中も白壁  
 や砂山を沿ふて行まも時發明いし。且諸の物  
 體の光りハ蠟燭や火や。また他の光る物らり通り光  
 線を放ちて汝が戸の節穴や窓の真向に見え通り日輪  
 を以てイデモ真直る線條も於て照ると云と。乃公が汝  
 と言ふ。然らば此真直の線條の方向を屈曲するも由  
 て變せしめ得るトヤ。汝が既ハ火燧鏡に於て見る通り

まごタ イツマ 話しと暗箱の中の凸面硝子鏡の態がある通  
 リドヤ。ナレバ火燧鏡の内よそこよ何事が出来らるト云  
 バ日輪の直線よ抗う日光線が火燧鏡よ由て屈曲られて  
 一點よまで集合せらるトヤ。然しチヨト是を見よ。  
 乃公がツの杖を持トヤ。この杖を乃公が此水を入る桶  
 よ突込トヤ。汝が今でハこの杖を如何よ眼よりする  
 トインヘイちやうど水の上面よ於て折とりの様よ眼よ  
 うりまを私ハそれを度々見ましと然しまご總てその  
 事の原因を知らとも思ひませなんど舟を突やりまをる  
 水竿よ私ガ此事をまご注目ましと 且その事ハ杖の

光線が水の上面よ真直よ眼の方よ届くもの。そこららバ  
 うり来るトヤ。水の中よ幾分やどら入てある。その線條が  
 屈曲られつし トインハア然らバ硝子や水を透りて行  
 ときの。その光ハ屈曲らるト見えま 且キツトサそ  
 れハさうトものトヤ。然しこの先をよく聞て居れト乃  
 公ガ汝よ此事を詳しく辨明せであらうらトヤ  
 ○物體から離れ来る光線ハ屈曲しめ得るトヤ。空氣うら  
 硝子や水の通りの他の素質を透して光線を透らる時  
 人が屈曲ると名け得るトヤ。乃公ガ此杖を水よ突込ト時  
 分よ汝ガ明ら見と通りよ光線ハ薄き素質うら稠厚き

素質に入らまこの稠厚き素質より薄き素質の中に入ら  
忽ち屈曲らるるトや火燧鏡トやの通常の眼鏡トやの夜  
學鏡などのあらゆる凸の硝子鏡が光線と焼點と名くる  
一定點に聚らしむるそれと違ふて近視眼の人の眼鏡の  
通りは凹の硝子鏡の反對のものとるもトやこの眼鏡は光  
線を遠ざけて廣潤しむるトやどう云道理の爲にまこの凸  
の硝子鏡は物體を大めて凹の硝子鏡は物體を小さく見せ  
るる望遠鏡トやの頭微鏡トやの幻術手燭などの作用の  
辨明に兼てそこにあるトや此屈曲の他は十分は知れ  
つて其他は眼鏡學が教へる通りは光線と鏡に屈曲て再

往反射せしめ得るトや然しるがら乃公の圖を以て辨解  
もてなすは眼鏡の説は分明るを備へば能はざして  
さ様も元來我等は決定しと部中に入ぬものトや故  
は乃公が汝はよく事廣く論トする冊子は就て讀しめや  
うと思ふ則ち麻爾珎の著述されたる理學樞要まは裴斯  
の庠校格致問答等の書トや我等が眼球や視えの式を  
簡略に觀して此皆の事を終らざるや然しよく氣を付て  
居れよ  
○前頭は於て骨の凹處に停住れる我等の眼球と云もの  
ハ強膜より成立ともものトや前の方より甚透明りてある膜

ハ角膜と名け、角膜の後、中央、孔のあつて、其膜ハ眼の色を出るも、所の一個の色、彩ある膜を烏晴と名く、この烏晴ハ光り、向ひ甚感、強くあるトヤ、烏晴の中の孔が、強き光り、ハ縮小りて、些少の光り、ハその孔が廣濶りて、その孔や或ハ瞳子が、それ、由て始終廣濶り、或ハ縮小る、その様、あるトヤ、日中、ハ唯眼、一個の線、があるト見、ある猫、よて明、此事を發明トヤ、然る、暗處、於て、其眼、圓くして、全く開きて、現、るトヤ、眼の前の方、此膜、角膜との間、眼球の最第一高の内、水様液と名くる、薄き液、があり、烏晴のこの孔の後、透明りて、球の様

みる體、見るトヤ、是を水晶液と名く、凸面硝子鏡、作用、通り、同様、作用ものトヤ、此水晶液の後、溶解せる、硝子の様、糊状の粘滑、液を以て、全く充滿、眼球の、最後窩、硝子様の液と名くるものがあるトヤ、此液の後、眼球の膜、固着、薄き黒色の膜、があるトヤ、此膜を網膜と名けて、此網膜の中、視神經が延出、その神經が、侵されて、我等、考按力や、感覺力を、繼、ひるトヤ、是を我等、が視、えと名くるトヤ、眼球の總て、此部分と、汝が大、煮、く、魚の頭、あるトヤ、見、得るトヤ、水様液、ハ煮る時、分、よ、出去て、烏晴ハ、硝子様の液の、氷羹状の上、浮んであり、水

晶液ハ煮るとき硬りて、硬固き白き豆の様にして、鉢の上  
 に見出さるゝトや、介様の安置しとる眼球が、烏晴の孔を  
 透る外來の物體の光線と皆受取て、黒色の網膜の上は外  
 來の物體を、同様は画圖をもトや、乃公が暗箱は就て言と  
 通りは、眼球が十分は暗箱の通りは、一様な作用で、此暗箱  
 の内はハ物體が倒映りてあるその様もあるトや、マコデ  
 諸物が我等の網膜の上は倒映りて色彩するトや、然しな  
 がら我等が諸物を真直に見るとを妨げカトや、ナゼハ茲  
 視神經の感覺を求むるらトや、然るは諸物が我等の  
 固有は直立つ比較は於て我等の眼球は轉倒して立所の

諸物を真直と名くる程は様は知りらトや、ナゼトハ土地  
 も供は轉倒して現はれて、諸物が餘義なく比較するら  
 らトや、まさしく我等は於て土地ハ下であり、その上は立  
 諸物も皆下でありて、何でもその上は昇る所の物ハ我等  
 の眼球ほどの様はあらゆる差別なく上であるトや、それ  
 故は物體の各個が、我等の眼ほどの様はあらゆる、我等の  
 感覺は區別を為ぬトや、我等が諸物を、物體のある所の土  
 地は比較して出来らトや、モコハ口人が屈で足の間  
 ちら見透る時は上はある代りは頭が下の方もある様は  
 それハ、眼球の中の影像は真直なるであらう、然しな

ら我等が真直に立しうの様も同様に見るものトヤウラ  
 「トイン 然らば我等の眼球ハナデモ 功者又出ク」  
 のでござりませぬ我等が萬有と近く寄て見ませれば極  
 極當然を以て驚き入ませぬ然し且那私が尊主ウラ虹の  
 色のれ話と聞かす私ハその虹橋を好んで見ませぬ  
 ソレ 椰亞と云人又まの 椰亞の後又生るゝでもあらう所  
 の總ての人又誠らしく造物神又由てバウリ定りたる不  
 思議の徴候としてイデツモあれを眺めませぬこれハ土地  
 が最早洪水を行らぬでもあらうト云その證據と考へる  
 クラでござりませぬ

唐土帝堯の時洪水あり西人皆死する獨

り 椰亞と云る人の機も残りて 椰亞の三子 且 虹橋が  
 の閃々雅弗より人民また生じ始むと云り

甚美麗しくあるとハ乃公が汝と一致するトヤ然しなぐ  
 ら虹橋が造物神又由て汝が名けたる目的にて椰亞又示  
 したとハ雖も其虹橋ハ不思議の徴候トヤの不思議の現  
 象であるでもあらうと云ふハ甚間違ふてあるトヤガさ  
 うでハなハトヤ此虹橋ハ甚天然自然の原因ウラ出來る  
 ものトヤ其橋ハイデツモ 日輪又相對て直線又立トヤさう  
 云中もよく氣を付れば驟雨又於て立もので決してそ  
 の他又ハ立ぬものトヤ水が唯光線を屈曲するのみならぬ  
 乃公が汝が名けし通り又光りもまた差異の色にて屈曲

るトや乃公ガ汝ニ見セシ所ノ三角硝子鏡ニテ態ガあり  
 一通りノモトヤサテ日輪ガ真直ニ我等ノ後ニ在テ驟雨  
 ニ向フテ照モ時ヌクマシハ我等ノ前ニある雲ニ向フテ  
 照モ時ヌハ落ル所ノ雨水ニその線條ガ屈曲リテ顔色ニ  
 分チ彩色一ト橋ノ形ニテ我等ノ視え又抗ルトヤサテそ  
 れニ就テ唯少一バツリ汝ガ考ヘトナラバ乃公ガ思ふニ  
 ハ日輪ト雨ガあツト時ハまシ虹橋ノ出來ルト汝ガ明  
 ク又解ラぬバならぬトヤソデコ虹橋ヲ洪水ノ後ニ始めて  
 定めたる不思議ノ徴候トシテ誠であるでもあらうと云  
 とを思ふトハ全く間違たる考へであるトヤ決してさう

てハなハトヤ古書ニモまシ造物神ガ此虹橋ヲ定めさせ  
 られトトハ言ぬトヤこれハ天然自然ノ現象で唯擲亞ト  
 為トス誓ノ徴候バウリノトトヤ雨ノトニ於テ只現  
 ハるトその徴候ガ證據ヲ定ルトならでハ元來この態ニ  
 ハ何ガあるウ汝ガチツト清明ニ日光で水ノ落降ルノト  
 下ノ方ウラ宛モ散満リト水ノ水滴ノ塵埃ノ雲ト出クモ大  
 きナル水機關ノ飛散ヲ見ル時日輪ガ汝ノ後ニ背ニある  
 程ニ立トナラバ汝ガまシその飛散ル水滴ノ中ニ虹橋ヲ  
 見ルであらうトテシそれニ由テ虹橋ハ雨滴ニ於テ光線ノ  
 屈曲リテ起ルより他ニハ起ラぬト云トを知テ乃公ガそ

の事を辨ト聞せと誠であるト云てを證據立てあるであ  
らう 「トイレ」その事ハ私ハ十分ニ理會いこま  
テ私が今萬有學と云ものハまこと此工合の迷ひを消失さ  
せるものと云てを知らしめ然らばから凸面硝子鏡や凹  
面硝子鏡の中ニ光りの屈曲りまをるとハどう云工合な  
ものでござりませぬ此事ハまご私ニハさつぱりとござ  
りませぬ然らば私ニ折を持してと様をとハ尊主  
ガ私ニ示して下さつと書物うら詳しく習ひましやうと  
思ひませ 「且その書物讀てを汝がまこと怠りてハならぬ  
トヤ」ナゼトバ 汝ガ萬有學を學バ學不と愈それガ面白く

なるであらうらトヤモコハ口 幻術手燭と云ものハ硝  
子ニ畫れとるあらゆる色を以て影像を壁ニ映しとる凸  
面硝子鏡と手燭の中ニある光りとの間ニ定りとる影像  
を映し頭微鏡と云ものハ極至小ニ蟲を汝ガその完全の  
形や各個の體の部分や運動の式や作用の式を見得る不  
ど大く見せ望遠鏡と云ものハ汝ガ遠離れとる物體を汝  
の前ニ近く持て來て近傍うら觀ト得し通りのものトヤ  
うらトヤ此皆の事を知てそれニ就ての作用や講解を理  
會するを孰ガ一人でも好ぬでもあらうラサテ我等ガ  
證據立をやらう



○證據立

○光素グ眼を貫く刺衝るを。我等グ目撃ともものトヤウ  
ら。何故又眼の衰弱き人ハ強き光り又向つて。氣を付て謹  
まねばならぬ。の道理を見るトヤ。ま何故又眼病人と  
安静又あらしむるを。為る世間を暗くなさねばならぬ  
の道理も見るトヤ。白色ハ總ての光線を強く反射して。  
雪ハ甚白くあるものトヤ。何故又日光り又抗る雪ハ  
眼球の為る害をべくある。それと違ふて天地の中は彌  
蔓りたる草木や。野菜の澤山なる綠色ハ。何故又眼球の為  
る愛をべくある。光りハ葉を綠色又為ものトヤ。故又ま

と冬は暗處又貯へられと刺格列乙の譽ハ并はまると萬草  
の心頭の卷葉と。アングイヒヤ。清正人參の卷葉ハ光りの  
流注する。より多分突離されてある。時何故又黄色又ある  
の道理とその中に見るトヤ。然しるがら紅燕菁トヤの  
紅蘿蔔トヤの他の草などの葉の色ハ全く綠色を逃れて  
違ふてもあらずとを考ふるを。さうでハ多いトヤ。此草の  
性質は青色の汁のわるとの中はあるトヤ。介様る。かそ  
の葉を絞る時紅燕菁の中は甚著くあるトヤ。それ又由て  
この紅色が出でさるトヤ。白色ハ總ての光線を反射し  
て。黒色ハそれを吸込とを辨明しと事り。於て日光

線が障りなく抗る白砂山の麓は、何故は蒸焼する様は  
 熱くあるうの道理もまに見るトや、何故は黒き衣服が速  
 く熱くあるう、詳しく云は、何故は黒色の羽織ハ、緑色や青  
 色などよりハ、温暖はあるうの道理も見るトや、強く凍る  
 時の冬の間は、於て壺の中は日日照も雪ハ解き、解きして然  
 し黒羅紗を以て被覆する時は、よく解るを見るトや、この  
 試験が萬有學家をして、桃樹や杏樹や李樹や葡萄蔓と植  
 てる所の板塼と、淺色は畫びいて、黒色は塗ぬば、やらぬと  
 の考へに至らしめ、それ由て日光線の温暖が、空氣の  
 反射されぬども、塼の材木は由て吸込れて、その材木の中

は野へらるトや、ツゴ材木が甚熱くなつて、それ由て  
 日輪の没と後、長く宛も蒸様にして、速くは熱さを、  
 は適當してあるトや、然しな、其後の試験が、黒色はよ  
 く多分の光や温暖を吸込て、黒色の物體がその周圍の空  
 氣より温暖はあれ、バ、忽ちまた再び多分の温暖を與へる  
 とを現はし、それと違ふて、白色ハ些少を取て、黒色の通  
 りは多分を自己より與へ、トや、それが為は冬は於て白  
 き衣服ハ、極く温暖はあるトや、ナゼトバ、身體中はある温  
 暖を衣服は貯へるうらトや、光耀く物體ハ、殊は金屬ハ、少  
 き温暖を與ふるものトや、此事ハ、乃公が既は前方言と通

りの事トヤ

○光りの屈曲するは由て日輪より我等まで来る日光線の  
 まま天空に於て屈曲せらるぬトヤ日輪がまど地平  
 の下<sup>海水面の下</sup>にありて真の<sup>地平</sup>にありて我等の眼の前<sup>地平</sup>に  
 見えるべくある都合はありトヤまど日輪の没と時忽ち  
 夜とならぬ日輪の出る時速に昼となるらぬ都合もまどを  
 こららであるトヤ空気の中は屈曲する光りが緩漫となる  
 昏界に沿ひて我等を暗き夜に進めて快よき同暈界が黎  
 明を<sup>出</sup>出して日輪の體の出るのを告知するらトヤ同  
 原因<sup>原因</sup>より我等がこの國にて通常海の隆起と名くる現象

が出来るトヤ汝が北風<sup>西風</sup>や東風<sup>東風</sup>の風ハ稀に出る  
 トヤを以て南海の方より或ハ他の廣き内海の水平にあ  
 りて反對の方に見えたらバ汝がその反對は船を明くは  
 見得るであらうバウリでハなく諸事諸物が空気の中  
 懸<sup>懸</sup>りの様は高く引揚てさへ見るであらう時としてハ  
 城郭トヤの市街トヤの船舶トヤの<sup>下</sup>を<sup>上</sup>する<sup>して</sup>轉  
 倒<sup>倒</sup>する<sup>りて</sup>空氣の中に見るであらうまど牧嶋トヤの巨  
 大<sup>大</sup>なる<sup>荒</sup>る<sup>る</sup>所の地面も屢々同事があるトヤ光りの線  
 條<sup>條</sup>が稀薄<sup>稀薄</sup>き素質<sup>素質</sup>より稠厚<sup>稠厚</sup>き素質<sup>素質</sup>に移り行<sup>行</sup>ハ屈曲<sup>屈曲</sup>られて  
 我等より低くある物を實にある處より高く現ハモトヤ

ナゼナ 日輪の温暖が土地の近傍の光線と光りの反射より著しく温暖となりて、それより由て少く高くありて、イデツ  
 寒冷き北東の風にて已に多く冷涼されてある。その片より薄くありしむる時よりハ、物體より我等の眼より來る光線がまさしく薄くして空虚となり、空氣より稠厚なる空氣は移り行て我等の眼が土地の上よりある所にて、まじ地平の下よりある時の日輪の見ゆる時、同事が出來ぬば、あらぬくらトヤ、種々の模様を一緒に聚ると温暖なる光線が十分高く隆起して、温暖の少く稠厚き空氣が薄き空氣の程より高さより注射する時よりハ、然る時よりハ、その又水平の下より

遠き距離よりある物體が轉倒となりて現はれぬば、あらぬ所の鏡が形つくらるトヤ、ソコデ甚温暖なる天氣に於て水多き牧鳴を越て見る所で、強く昇上る蒸氣が寒冷き北東の風にて始に昇ると蒸氣を速く冷めてが出來る。宛も稠厚なりとる蒸氣の卧褥の様より土地の上より五六弗多を止りしむるトヤ、その時よりハ、その昇上ると蒸氣を長れは於て見る所で、日輪は抗り遠き距離の上の物體が水中より降來る露の中よりあるりの様より見ゆる程稠厚つて現はるトヤ、邦の縣名より、厩樓、名、各、く、ハ、蜃、の、吹、樓、ハ、ハ、あ、ら、む、こ、も、由て、縣、名、の、城、と、映、る、市、街、の、天、氣、志、の、と、ら、む、の、稠、厚

つと蒸氣の中は耀きて鏡の様は現はつて見出もト  
 や、ソコ眼鏡を以て物體の方を見れば、その物體が昇上り  
 て稠厚つと蒸氣は由て日輪に向ひて、その暗き方は於て  
 見れば懼しく波立て躍る所の運動を起し、その見るとや  
 ガ始終土地より昇上る蒸氣は光線の屈曲する由て日  
 輪や月の出没する時は、天は高くある時より甚赤く  
 て、大くあるのを見るときがあるトや、横は土地を沿ひ蒸氣  
 を透して見る所で、日月の體が我等の眼は大まりて、楯角  
 の様は想像して色を變るトや、造物神が人倫は如何バウ  
 り面白く如何バウり大造は造せられ、なんごもの無量

く、多く勝るとる事件を人倫の辨用や喜悅まで、光りの屈  
 曲するとさへも持來させられまい  
 ○光線の屈曲するその効驗は就て廣く取扱ふて、乃公がま  
 ど視學の器械と汝は説示し、ハ能はぬとが、我等の了簡と  
 見進さぬものトや故は乃公の約束せしめて、隨ひて汝は  
 まど幻術手燭や火燧鏡は就ての彼此と言聞するとなら  
 ば、何れも加へぬとが、乃公はハどうもいとをべくハな  
 りトや、其作用を全く辨明もとの為は、ハ肝要なもをい  
 ぐ、その器械を以て為す術と汝は見るとトやの、まど別  
 てハ迷ひ信仰をさせ、まど不學な者を欺き、まど適ふと

を言のミトヤ

○幻術手燭と云物ハ通常の手燭や或ハ家の手燭は似たる術器械であるトヤ。周圍ハ塞つたる管の種類であつて硝子鏡と懸たる圓い孔の前バツリ此彼の像を以て畫てあるものトヤ。硝子鏡の其他の處ハ不透明の黒色を以て覆れてありて色が透明である像バツリを見る程はあるとヤ。また其他ハ管の中より手燭の中より置と光りが、それを以て業作せんと思ふ時照して見せるブリキ管と硝子鏡の間に錫の中ニ硝子の凸面硝子鏡があるトヤ。サテ此術器械の装置を用意しと時そこは何事が出来るト云

ハ透明である物體が始めは強く照されて次は光りが物體の色と共に輸れつゝ透り行トヤ。チウド我等が暗箱に就て言通りトヤ。然るがらその線條が一つハ聚らぬトヤ。然し廣がりてあるトヤ。その線條を聚るその為は次の凸面硝子鏡が用立トヤ。此硝子鏡ハ線條を屈曲してその線條の散行のと互ひ又一點に聚るトヤ。サテ白き木綿トヤの屏風トヤの羅紗トヤのと張て、線條が聚る處の場處に置時ハ硝子鏡の上は畫きたる物體が總ての色と共に大まりて汝がよく見とと乃公は言と通り又そこは像が映るトヤ。今乃公が愚昧なる迷ひ信仰の人民を欺きて

の為は術と為うと思ふ時それをどう置きを汝は辨明さ  
 うと思ふ萬有の外の威力を持つて死ん人や現世も居らぬ  
 人を見せしむると噂するにやあるにや。モコハ口大名ト  
 やの年老の學者トやの僧侶トやのまゝ諸人が知る顔は  
 稍似たる人トやの或ハ孰某も似てあると思ふ様に入が  
 ある時その時術は掛るであらう時ハ幻術手燭が餘義  
 もなき良薬であるトや乃公が已に第一回の講釋は言  
 通り人ハ幻術手燭を見るにハ出來ぬ様都合は置ト  
 や不學者や迷ひ信仰の人ハ此觀場を以て欺さうと思ふ  
 時ハ術手燭の成立や用法と氣を付て秘密もするにハ汝

がよく解るにトやサテ男女の人々や種々の老若の人や  
 差異の位の人肖像を畫する數多き硝子鏡と持トや待  
 見んと思ふ所の人を聞つくらうて見ると未むる人の近  
 傍は像が現ハるに現ハれぬ。その像の本體のある硝  
 子鏡の一枚を取てその肖像を真黒な部屋の内は屏風の  
 上より羅紗の上より乃公が言と通りハその恰好は現ハ  
 せトや多分の眩惑を為んがとめは先死人トやの磔の鎗  
 は掛と人トやの蛇うら巻れと人トやの時としてハ雷鳴  
 の聲の突枕る事トやのまゝハ燃る草の實の種類はて電  
 光トやのと云ものも以て傍觀人をして恐懼がらせて迷

惑るる為は拵へられと後又个様もするトヤ時としてハ  
 屏風や羅紗の代り又ウイロロの煙を用ふるトヤ其時  
 ハ觀場が假令その煙がむつりくありてもまど餘慶又  
 怒を起さべくあるトヤ

○多分ハ扁平く研磨する凹面硝子鏡より出來と火燧鏡  
 第一會の講釋と云ものハ像や物體の形と前より甚明  
 瞭謂凹面鏡なりと云ものハ像や物體の形と前より甚明  
 り又見ざる性質がありてそこ又何れもあらぬ所の劇場  
 の上又見ざるトヤ然しなぐら所謂幽霊と此處彼處り  
 ら見ざる為ハ適ハぬトヤナレバ此又て見ざる物體ハ  
 唯直線又て劇場の平面ハバウリウ或ハこれを見せやう

と思ふ場處ハバウリ見らるゝものトヤウラ同様又腸又  
 坐りて居る人ハ何れも見えぬトヤ  
 ○幻術手燭より多く適當して尚強きてハ生とる人やま  
 と偶入り眞の画像を置とる術箱や幻術箱であるトヤ  
 この器械と持て術と為ふと思ふ所で外の方ハ世間が眞  
 黒もある様は氣を付てその箱と甚強く照をトヤ个様も  
 箱の前端又磨いとる凸面硝子鏡が懸る孔があるトヤそ  
 の硝子鏡の媒は由て屏風の上又箱又置れとる物體と  
 暗箱の内の通り又ちようどその通り又現ハまトヤその  
 作用ハ總ての目的は於て同事であるトヤ物體と眞直又



為その為は硝子鏡の上はまゝと物體の像と轉倒をせる平  
 面を鏡を置りやサテ一つの部屋は術者箱を持て閉塞  
 戸を以て陰する屏風の戸の孔の前はありてまゝ一  
 の部屋は傍觀人がありて世間が真黒にして互ひは後  
 續く二つの部屋があるを汝は思ひて見よその他は術  
 箱の内は置れたる婦人が白き襟領を覆ひ手は手燭を持  
 て墓處うら出さうの様は恰好して現はれて人がその戸  
 と開ひさうまゝと速く曇暗き光りの中は此生と様は像  
 が屏風の上は見えぬであらうを汝は思ひて見よ何と  
 汝は考ふるや事件の誠の模様は不學なる人ハ精神の

現はれさるゝの考案をなして實は幽霊を見よと思ふ傍  
 觀人の數多さを恐れさせねばあるまいぞや  
 ○近世では總ての此術が萬有學の次第くは明くるを  
 由て稍通常なるつと然るがら百年前も今様は術者  
 がわりりとチツト汝は思ひて見よ然る時ハその術者  
 の各々が悪魔使の幻術者や死人を引起を事うとせるで  
 もあらうてが明らるハあるまいや然るに我等ハ此學問  
 如何にバリの恩は構つてあるまいや此學問ハ我等は  
 ありある眩惑を辨識せ總ての欺を明らる現はして殊  
 に入倫が死人を引起をその態はあるでもあらうと云て

の造物神と辱しむる考へを防ぐトや。去りのとみらむ此  
 ままとナヨト止るその為事氣抜しと様又考へるて  
 なるる。死人と引起せよハ。何事が出来ぬバるらぬも  
 のト云バ。この事あらでハ何れもあつたトや。各個は崩れ  
 て諸方は散る素質分子と一緒集てそれくら人倫の  
 身體の骨トやの肉トやの液類トやの脈管などの千萬の  
 数を聚てその都合よして全き人倫が形づくられやうと  
 云トトや。まゝと萬有が始は男女の媾合をよして次は母體  
 と用意して。その他は毎年後又續て成長するて入用  
 なる所のその一瞬間は於て同事が出来るもの。恐くハ

今様る體の拵へ立を孰が一人でも考へる者ハよいト云  
 であらう。これハ唯死どもの魂魄と現ハを所の形のこ  
 であるトや。汝が知とかりは其事が同く觸るべくないト  
 や。まさしく乃公が思ふ通りは第一回の講釋は於て素質  
 であるものハ決して我等の五神を侵し能ハぬト云を  
 極明は見せとのトや。それハ必素質ある物體から分れ  
 て來て我等の眼は掛る光線であらぬバならぬ。テナバ我  
 等が見るをハあらぬトや。造物神が死人を引起し。まゝと現  
 ハれしむるては。煮扱は使ふ様るをハ為れぬトや。ナゼナ  
 造物神が今様を不思議と。今日が日にて我等の眼は為せ

ら此ぬららトヤその不思議なるが我等の爲る肝要なる事  
 ともあらむその事が造物神の智慧を以て个様る夥多し  
 きてをるし或ハ人倫の新説を好むるは養ひとるるをや  
 人倫の喜びとるるを憙むとめは決して一致をなさ  
 れぬトヤ悪魔鬼神の作用は由てはまとは何れも爲ハ能ハ  
 ぬトヤ此物ハ一も威力があらぬらトヤ乃公が第三回  
 の講釋にて辨明しと通りトヤ然るは此欺事を以て取除  
 て見よ死人を引起きてハ唯神通自在なる人の作用の  
 であつて全く人倫の考へは越てあるトヤ造物神がま  
 と極尊き力にて茲は土地の上は現ハれてその不思議を

ふも威力は由てはまとは他の態にてハその神通自在なる  
 遺物と示もを爲せられとガ極勝たる聖人のとつと一  
 人又造物神よりその神通自在の威力を免させられとぞ  
 やサテ我等が先をやらう  
 ○眼球は就て乃公が汝は示しと辨明して爲晴と名けし  
 色彩しと膜ハ光りの増進もにて引縮りて減少する時は  
 ハ廣潤なご光りも向ふて感ト強くなるを乃公が目撃  
 るトヤ我等が膏は暗處に居る鴟梟の所謂鳥暗の孔が  
 甚廣潤くなされと時我等は夜分はあり態の通りは速  
 くと燃る光りも於てハ殆ど何れも見ハ能ハぬ事ハそれ

が為トヤ、眼の速ク又縮ムトヤ、或ハ鳥晴の速ク又引縮ム  
 トグ、眼病を起シ、ヤ、鳥晴の膜の過度テの引縮ムト、廣  
 瀾トト、目と甚勞クモ故、明と暗との毎度の交換が甚  
 害ヲ与ると云トをそれラ習ふトヤ、此基本ニテ、イツモ  
 如何程ク暗クモ、緑色眼鏡を懸るモ、退ねハなら  
 ぬでもあらう。ナレバ、ナ眼鏡が、今様ニ眼鏡の懸如シ、毎ニ始  
 終、光りの差を受取テ、ソコ眼鏡を勞クモものトヤ、やりらド  
 ヤ、此色彩ト、鳥晴の膜ハ、夜分ニ重ドツテ、盗ニ出行ま  
 出行ね、バ、ならぬ、猫トヤの、鳩鼻トヤの、他の、獸類ニハ、光り  
 の為ニ、忍ク感ト強クあるトヤ、猫ヤ、鳩鼻などの、眼を、昼

見る時、元來鳥晴が、全く引縮リテ、唯それが、見得る糸の  
 大さバ、ク、リを、開クの、を見るトヤ、獸類が、暗處ニある時ハ  
 全く開ヒテ、その、眼球が、全く圓クあるトヤ、暗處ニ於テ、明  
 ク又見たり、また強ク見たり、その道理ハ、頗る、憶ニあ  
 るトヤ、「トイン眼鏡」就テ、話トを、さる所、私、老人  
 の輩トヤの、近視眼の、輩が、眼鏡の、ある時、より、眼鏡を、以テ  
 ハ、甚よく、見ま、も、を考ヘ、ま、何處、ラ、その、能、見、る  
 ト、カ、來リ、ま、と、眼鏡と、云物ハ、元來、眼鏡ニ、何事ト、為、ま、の  
 、「私ハ、好んで、知、さ、く、ご、ざり、ま、也」且、眼鏡ハ、老人、の、ま、と  
 他、の、眼、の、弱、き、態、と、受、と、る、欠、め、と、補、ふ、ト、な、ら、で、ハ、眼球ニ

何れも他の事を為ぬトや乃公が汝は暗箱に就て何事を  
 言さう。チツト考へて見よ。サテ眼球と云ふハちやうど  
 暗箱の通りであるトや乃公がまさしく暗箱の板の孔は  
 向いて外の物體から廣がりて来る光線を紙や羅紗の上  
 ちやうど一點に聚りて来る。程々様々互ひに屈曲する磨  
 ころ凸面硝子鏡を置ねばならぬ。その一點より紙が  
 遠く離れてあるう。眼鏡の近くはあれバ諸事諸物がその  
 明らるることを失ふて曇濁て紛亂さるトやサテ善長を  
 眼に於てハ諸事諸物が外から入来る光線と眼球の外套  
 の球形と内部の液との為は眼球の後の方ちやうど網

膜に集り来る様は屈曲聚らるる程置れてあるトや。フレ  
 そこは諸事諸物が暗箱の内よりの様は甚明くは画圖ト  
 や。網膜の上の画圖が明くはあり曇てある度は隨がひて  
 眼が清明に見え曇暗く見えるトや老人や眼の弱き人ハ  
 眼球の球形が通常減少して。それは由て光線を速くは屈  
 曲しぬトや。ナレバ硝子鏡が球形はあれバあるやど愈  
 多く光線を屈曲するものトや。然る時よその點ハ  
 網膜の上は多分は聚りてハならぬ。然くまれば諸事諸物  
 が。まゝ曇暗くあり紛亂様なるトや。適當なる文字が  
 互ひに交りて讀れぬ様なるのちやうど年齢の欠

換の工合は適ふ様にもトヤ。サテ茲は何事をもるぞト云バ、萬有學ハその球形は欠けのあるを復さんが為の方術と書與へともトヤ。眼鏡が凸ある通常の眼鏡と眼は懸れば、線條を屈曲助て諸事諸物がまゝ網膜の上は明り來り立トヤ。ソレハ善良な眼と持し通り、その通りは見るトヤ。近視眼の人ハまさしく反對である。此人ハ眼鏡の外套が餘り球形は過てあるトヤ。それが為まゝ眼鏡を用ひねばならぬ。然し、ぐら餘り速なる屈曲を防ぐ為、凹の眼鏡を用ひねばならぬトヤ。トイン、私ハそれと解しと思ひまも。且那眼鏡の作用や大入用ると甚

明り見込まき。且然らば客人よ、これを以て乃公が汝の為や。汝の肝要をなまで、隙費と萬有學の講釋ハ終とぞや。乃公が思ふハ、汝が諸方より汝を取ま、萬有の中は最早餘分は見慣ぬものハあるまい。程十分は汝が得道させとを見るトヤ。サテ汝が此講釋を添て、此官府より出板となつと、庠校格致問答を繼ならば、然る時はハ諸事諸物が汝は尚々明亮なるであらう。また此講釋をもる時度々なりと證據立が、汝は尚多く分明は現はるゝであらう。然し、るがら汝が總て汝の前方の臆接りら、廖と廖とぬりを乃公は當然は言て見よ。汝がまさしく萬有の外

物ハ何ニモ我等の五神を侵し能ハざりて始ハハまゝ如  
何ニ不思議ニあらう。諸事諸物が甚天然自然ニ萬有自  
らの作用りら辨明し事ヲ證據立て見よものトヤウラ  
「トインヘイ且那尊主ガ心切ニ私ニ教ヘ下さつと萬  
有學ハ私ニ於て總ての臆按トヤの總ての迷ひ信仰トヤ  
のヲ逐除ましとを私ハ敢て申しませる。惡魔鬼神や幽  
靈やなどハ總ての萬有の外ノ現象の通りニ妄想でござ  
りませるトヤ。ナゼトバマ聲ト申すものハ聲ヲ發る體ニ由  
て運動ニ持來されとる。震顛とここの空氣でござりませ  
ぬバ我等ニ耳ニ來らぬと云フを甚よく私ガ證據立ま

とらトヤ。まゝ光線ハ物體より離れ來るでござりませ  
ぬバ私の眼球ニ觸て私ニそれを見せませぬでござりま  
しやう。まゝ實ニ物體でござりませる所の物ならでハ  
私ニ由てハ何ニモ觸られハ得ませぬトヤの。カニデツマ  
バ何ニモ素質でなき物トヤの。體でなきものハ皆我等  
の五神を侵しハ出來らうでござりませ。ナゼトバマを  
の物ハ抗拒ぬでござりませ。やうし抗拒をせる所の物ハ  
明クニ素質ニして萬有ニあるトを示して證據見せませ  
るくらトヤ。ナアそれハさうでハござりませぬ。且那  
且ナル。それハさうトヤ。乃公ガ汝ニ甚肝要の物であつ

とてを喜びと思ふトや何でも魂魄と名け萬有の外物  
 と名くる諸物の素質の原因の考へはバツリ慣る我等  
 の才智は由てハ解らぬトやガ神佛達が多分間隔なく部  
 中に入てある眼は見えざる世界の此世の後ハ一箇の生  
 活の世が成立ト也然し其ありがとさきとグ唯宗旨を信仰  
 する者と作法正しく證據見せと手相バツリであるトや然  
 しそのとら元來如何ト云言が全く我等の考への上は  
 高上つてあるトや世の中ハ脱脚する事と辨明さうと思  
 ふ所の人の己の力ハ越行所の業作を企つるトやナレバ  
 己の考への了簡なまで部中に入ぬ事件を論ずるものト

ヤウラーヤ  
 トマイルれ免し下され且那我等が分袂をいとま前ハ尊主  
 なまご言ぬハならぬとがござりまも私ハ迷ひ信仰を防  
 ぎまもるハ私自らハ十分ハ替古いとしまいと存トま  
 する然しなぐら他人え復話しいとしまもるハいまごカ  
 ト十分ハいとませぬそれが成るものでござりまーヤ  
 ならバ人々の迷ひを度しとさきものでござりまも一二日  
 前ハ私ガ村の知音と話しいとしまーガ此男ハ大分の  
 學者でござりまー此男も幽霊や幻術者ハ信用をい  
 こーませまんど然しあがらキツ此男ガ辨明し能ハぬ物



ぐ。そこはあらぬ。なるぬ。ト云々と。信用もする。と。うら脱除  
 る。その能いぬと云々と。私に話して。ま。と。モ。コ。ハ。口。甚信用  
 する。婦人の其母親が。彼男は。數度も話して。ま。と。事。が。ご。ご  
 り。ま。と。げ。る。其。母。親。が。ま。ご。奉。公。ざ。り。り。で。あ。つ。て。そ。こ。の  
 婢女と共。一。と。び。病。氣。よ。て。寢。室。に。横。に。な。つ。と。奥。様。が。寤  
 覺。ら。れ。と。を。見。て。夜。分。は。暗。處。に。脇。の。部。屋。に。物。を。尋。ら。る。り  
 と。思。ふ。所。で。鏡。の。下。に。明。り。は。黒。き。衣。服。を。覆。さ。る。棺。の。立。り  
 を。見。ま。し。と。げ。な。つ。て。そ。の。死。骸。が。ら  
 や。う。ど。脇。の。部。屋。に。その。鏡。の。下。に。置。れ。と。の。を。見。よ。ト。申。し  
 ま。し。と。げ。る。

○ま。と。其。父。親。が。火。の。側。に。静。坐。り。て。あ。る。の。に。家。の。内。に。懼  
 しい。音。聲。を。聞。て。諸。人。が。飛。上。り。ま。し。と。け。る。が。家。を。點。驗。し  
 と。し。て。見。ま。し。と。れ。ど。何。れ。も。そ。の。場。處。に。見。出。し。ま。せ。る。ん  
 ど。げ。る。然。し。そ。の。態。が。何。と。思。ふ。ぞ。其。後。直。に。國。の。外。に。住。を  
 の。妹。が。その。日。死。ん。ど。と。を。知。る。手。紙。を。得。と。げ。る。で。ご。ご  
 り。ま。ま。

○此。男。が。屢。く。犬。の。吠。る。聲。ト。や。の。鳩。巢。の。鳴。聲。ト。や。の。鴉。の  
 鳴。聲。を。ど。う。云。續。は。て。り。聞。ま。し。と。げ。る。し。う。の。を。ま。ら。む。を  
 の。犬。が。家。の。近。傍。に。さ。様。の。穴。を。穿。と。と。好。ん。で。見。せ。ぬ  
 けれど。その。犬。が。始。終。さ。様。の。恐。る。べき。穴。を。家。の。近。傍。に。掘。

へこの後直はその知音の庭男が死るのを見まゝと  
 げる。サマタ鏡の破碎するその後ドヤの袖珍時計の裏  
 然聲「やの」が屢々悪事を出りものを見たと此男が申し  
 まし。このまゝ冠帽りて産れし人倫は多くの事件を前以て  
 知て居ると云ふ。世間は知れどつてござりまして。まゝ  
 人倫が時をらもして氣味の悪い夢を見まもるが度々そ  
 の時分は甚悪にくるると此男が申しまもる。ドヤ  
 ○此男が續きよく私に語りまもるのをご覧よ。我等が  
 まゝ此皆の事就て心切に話さし出来ませどして私  
 うその彼此就て十分功者にして。憤りまござりませぬ

ものドヤ故に私に彼男は萬有學の基本にて諸事諸物を  
 辨明し事の状態にござりませぬ。それのまゝなら私  
 が昔時の弱力さへ稍復言けぶせらるゝと覺えまもる。ソレ  
 其男が實に萬有學の學問にて辨明をべくあらぬ。恠事か  
 わりしを信用する為速く私を疑ひは引込とくと  
 てもござりまゝやう。私が専主の教へや示しを思ひど  
 て。私自らそれに向て稍強るを存しまゝとならば。さ様  
 よもござりまもると思ひまもる。が願でござりまもる私を  
 此先當然に助て下さりませ。ソレ只今申しする事件を私  
 自らの為にも他人を防ぐもの為にも成まゝやうと存し

まきうら私と共論を取扱ふて此集會を終つて下さる  
 正ハハひまきまといふ  
 且那神妙な男よサテ神妙な男よその好朋友が全く迷ひ  
 信仰の朋友が汝をバ直ニ復迷ハ一めうと一とでもあら  
 うクマ悪い奴トヤナア其事ハ多くの學問を一と後ハ  
 實ニ通用ぬトヤナレバ實ニ恠事ニ信用もる人ハその人  
 が信用イヤと思ふ所の諸事諸物を信用もる状態ニあ  
 るウラトヤ此實ニ恠事ニ信用もるトハ己を陰覆トの爲  
 ニ用ふる言のにてあるトヤナレバ天道と云ものハ忝け  
 ないものであつて時世少既ニ夥多の人倫の幽靈と信用

そるを言て愧ふやどさ様ニ明クニ成とくらトヤ然  
 し方から萬有の外のこと多ク恠事として見る所の人ハ  
 實ニ十分の迷ひ信仰者であるトヤガ極學問一とる者ト  
 ヤの勝れて萬有學を驗査もる人てさへも決して萬有ク  
 りらゆるカヤあらゆる作用やま此素質と彼素質との  
 あらゆる流注やま素質てない所の物ニ就ての素質の  
 連合ハや關係ハや系ニまとの心意を達んが為ニ筋を  
 衝動ニ神經の上ニ我等の心意の作用ガ我等ニ知れとつ  
 てある所の事などハ乃公ガ免もトヤ萬有の中ニ作用て  
 此ら彼ニ作用ガ成立ところの事がわりうる云とも

乃公が免もトや我等がそれニ就て原因や基本を知見い  
 どもとるゝもまゝ免もトや此ハ汝の迷ひ信仰しとる  
 朋友の恠事よりハ全く他の事件であるトや。これハ此素  
 質が他の素質の上ニ作用し或ハ萬有の力が素質の上ニ  
 作用しとイフモ言ねばならぬや。さ様々事件であるト  
 や。モノハ一般の別カニ於てよもせよ我等の精神の我  
 等の體ニ流注して於てよもせよ我等の體より精神の上  
 ニ作用を見ざる通りトや。ガ然し前ニよれよ。乃公が好ん  
 で汝の願ひは満足さしやうぞ。ソレ汝の諸の迷ひ信仰を  
 それを以て根も枝も共ニ引拔を望むトや。まゝとそこニ事

件が残りてありうる。まゝ汝の朋友と論する状態はあ  
 るらば。汝が折を以て見出さざらうとトや。サテ我等  
 が始め一般の前表の作用を見しやうぞ。次ニタツタ言  
 と迷ひ信仰の話しを見しやうぞや  
 ○前表ニ就て論せんと思ふ時ハ何でもそれニ由て理  
 會する事件を先知てそれと共ニ一致してあらねばなら  
 ぬ。徴候や或ハ前表ハ元來萬有の中ニ徴候のある事件の  
 基本や原因を已自ら解りて曾て欠けのなくイフモその  
 事件ニ先立もる程の事件の現ハれ事と理會するトや。モ  
 コハ口低い驗晴儀や南西の風よてハ。空氣が風の中ニ濃

厚まりて見ゆる時ハ、その事件が雨の前表である。ナレバナ濃厚なる空氣ハ雨と持來も雲の本體であるものトヤウラ、まゝ冬ニ於て高き驗晴儀の時透明なる空氣や東風の時ハ、沍寒の前表である。ナレバナこの風が我等ニ沍寒を起す所の寒冷して、乾燥なる空氣を輸るものトヤウラ、まゝ醫者達ガ病人と看て、込寄ところの死の隨ふる前表を知トヤ。その徴候ハ或部分の既ニ進んごる。腐敗死肉より現ハるゝ所のものトヤ。まゝイデツモハ通用せぬ前表があり。此ハ十分まらざる事件ニ罹る所のものトヤ。モコハ口香臭ある物體ガ通常より多く、臭氣を發て廣ぐる時ハ、そ

の事件が屢々雨の前表であるトヤ。然らばその事件ハ空氣が輕くあるをならでハ、他ニハ何れも現ハさぬトヤ。ナレバナ輕き空氣の中ニハ物體ガより容易く蒸發するものトヤ。ウラソデコ輕き空氣の時ハ、多分雨ガあるトヤ。然レイデツモでハ、な、い、ま、ま、イデツモ、多少前表である事件とツキト連合てある多くの他の天然自然の前表を知トヤ。サテ此目撃する事件と犬の立吠などの事件ニ證據を取ふぞ。よ、乃公ガ諸人ニ片よらむして、犬の立吠や鴉の啞啞鳴聲や、鴉の鳴聲や、鏡の破碎や等のを、近傍の人の死歟状態ニハ、キツ如何ト連合があるものト尋ねられバ

まさしく世界は馬の嘶や牛の吼や家鴨の鳴聲や等のも  
 ならでハ一つも怪事ハ無いト云ふガ所謂悪心ハ獸類の  
 聲がマコデ一つも前表でハあり能ハぬトヤ我等が知れ  
 らざる今日が日まで萬有學まで此彼の間の陰れとる  
 連合があるを免しとれども个様を徴候があり一時毎  
 度はまた事件が繼ねばならざりしで餘義もなく諷で  
 あらねばならぬとガ然し乃公ガ汝は願ふをハ經驗が  
 助言するトトヤ鳴鼻の鳴聲トヤの犬の立吠トヤのガど  
 の様は屡々あるまいと久しく貯へと硝子や鏡が破  
 碎まいろどの様は度々恐る音聲を聞まいろ  
 公ガ此ハ二乃

四の講釋の證據立てて現ハ格段なる事件が出来る  
 と通り又容易くあると云ふり  
 一は或ハ隣も家の内も此彼の事件を見出さざり  
 てその後直人倫が死す所ハ何處もある乃公ガ十四  
 五の時分は操樹の書物單司を持し時分は袖珍時計の  
 多の戛然聲のあつたのを思ひどしその事件が何れも  
 他の續きなくして出来るとドヤ乃公の書物單司が久  
 くなればなるやど愈それが脆くあると云ふらでハ何れも  
 あらなれどナレバナその中ハ戛然聲のある書物單司が小  
 蟲の戛然聲より他のものでハあらざりしと云ふ  
 ハ汝ガ千八百七十年の文社官府の曆の中ハ圖を書て書記

くるを見る所のものであるトヤ材木が蟲穴を以て行義  
 正しくして居るがそれが為は脆く入りし所のものトヤ  
 曇くまの障子が陳腐なる時出来るまで日外ぞ汝の寢室  
 汝が憂然聲を聞ときる障子を精密に氣を付けて見て見  
 よ汝が所謂小蟲が藏たるその小穴を見出であらうか  
 さうでないぞよ客人それハ皆馬鹿ものであるそれハ何  
 處々ら來るト云バ人が死どり死骸が床を越て行とり  
 する諸の事ハ則ち迷ひ信仰の人倫が氣つくるぞよ或人  
 が言のまハその犬が怒りひ聲を持ふうその鳴鳥が何と  
 鳴ふうその鴉が家の周圍を啞啞鳴て飛あるうふり或ハ

まとその犬が既久一ひ間ういつてどう云恐りき大き  
 な穴を穿ふうその同事が百も千もの他の人倫又出來て  
 もそこは何れも繼ぎまも何れも目的をハあらぬりら  
 ト云ぞよ言て見れば人々毎が迷ひ信仰してないものト  
 やりらそこは一も氣を付ぬのトや迷ひ信仰の眞實の富  
 殖と云ものハ元來幾千度も事件が迷ひ信仰の規則は隨  
 ひて出來し時その出來し事件をバ那處彼處も話しまハ  
 つて註は註つけて話もそのその中にあるトや然るまが  
 らその事件が出來ぬその他の千度も氣を付けて黙  
 て思ひて見ればその出來損ひは就て愧るのトやナゼバナ

ちよつと考へても見よ茲又言とる皆の徴候ハ何てある  
 う。まさしく萬有の事ことで甚天然自然じぜんの事件じけんであるものト  
 やうらトヤガ犬いぬの聲こゑと云ものハ。その吠わいる時ときの様やう又巳おれの  
 意いを發はつる或言語あることばであるトヤ外やう又あつて夜分やぶん又犬いぬの互たがひ  
 又掛合かひあて吠わいたり立吠たちわいしりりして。それ又由よつて互たがひ又遠とほき  
 距離へいりまで宛あつちも物ものを呼寄よびよる様やうをどの様やう又屢しばしばく聞きまいら  
 ちやうどその通り穴あなを穿あてハ犬いぬ又甚固有いぜんじゆであるトヤ。  
 多くの犬いぬが殊ことごとく又嵐あらしもせよ土龍つちりゆうもせよ蟲むしもせよ土つち  
 地ちの中ちゆう又臭氣くさいを興おこ時とき又様やうをとる。まこと眞實しんじつの態あたまり  
 らもなまトヤ殊ことごとくハ犬いぬが繫つれてあるう。閉込とぢこめられてうあ

れバさ様やうなを為なすトヤまこと或ハ遊事あそびごとくらも為なすトヤ  
 ○鴉うらの鳴聲なうや鴉うらの鳴聲なうハ此鳥このとり又固有じゆごる天然自然じぜんの  
 聲こゑであるトヤ。テコ他たの鳥とりの啼な鳴なの様やう又不思議ふしぎのトてハ  
 ない杜鵑このくぎとの鳴なのでも此この鳥とりのけくけくの聲こゑを發はつるまども此  
 鳥このとりの謠歌うたであるトヤ。大おほの立吠たちわいトヤの鴉うらの鳴聲なうやると  
 が多くの人倫このじん又惡心あくしんを以もつて迷まよひ信仰しんじゆの導みちびを與あへ  
 のトヤ  
 ○鏡かみや硝子鏡びいどろかみの破碎やぶトハ何なにが拘かむと云ハ是ハ自みづから  
 片々かたかた又破碎やぶて多くの摸様もやうがそこ又扶助たすけして種々しんしんの天然  
 自然じぜんの原因げんいんくら成立りゅうじつものトヤ。此事このことハ乃公なれんガ既すで又前方まへ第



二回の講釋にて、目繫りぬと通りトヤ、屢く鏡が懸る所の  
 繩が腐壞て、十分の抗拒の欠て、鏡と下と落るトヤ、此性  
 質のわらゆる他の前表も、まゝその通りであるトヤ  
 「ト、私ハ今甚よく尊主のこ説で、理會いさし、まゝ、且  
 那も、彼事ハ、天然自然の徴候て、いござりませぬ、然し神  
 通自在の造物神が、死る状態を、知るトヤ、まゝ人倫も占  
 點をさしとり、諫とさしとり、その貪乏の生計を、見離して  
 の為、或人倫や、獸類も、此一點子、明慶を、バ、るぜ、賦  
 與させられ、まゝ、ものでござりませり  
 且、那神通自在の造物神が、或人倫や、獸類も、就て、何を為せ

られとでもあらう、くま、と何を賦與させられとでもあら  
 う、我等で、能定さる、出来ぬトヤ、然し、或人倫も、一點  
 子の明慶を、賦與させられと、や、或ハ、その人倫、同士の、中  
 の、死る状態を、前見する、威力や、まゝ、ハ、汝が、そこ、言通り  
 の、其、恰好、よて、占點を、為さ、ハ、何事、も、拘る、ク、實、その、人  
 倫、も、打明りの、心を、與へる、ト、ても、あらう、ト、ヤ、ガ、實、その  
 の、事、が、出来ぬトヤ、乃、公、ケ、汝、も、既、第五回、の、講釋、よて、示  
 し、と、通り、トヤ、ガ、人倫、の下、よ、さ、様、も、遠く、あつて、不、相、當、も  
 して、非、難、されぬ、仁、義、禮、智、の、心、を、ま、き、獸、類、も、就、て、さ、様、も、と  
 ク、出来、る、でも、あらう、と、を、全、く、不、都、合、よ、して、我、等、の、心、も

留ねての爲にも、まゝ或人倫に就て其事があつたらんハ、  
 此占點の徴候が明くヨリて、極定であつてハ、ちらんども  
 介様を考へて爲すハ、まゝくして、竝行の人を知るとんぬつ  
 しく、彼人でもまゝ彼人バクリても他の人でも、何も開  
 係ぬやじさ様もあるドや然し、まゝそれと就てのあらあ  
 る格段の事、甚精密なハ、どう云ものぞ然し、ながらその  
 事ハ、決してあらむして用立るでもあらうし、まゝ用立  
 ぬバ、るらる人どもであらう、其占點が決して出来ぬりや  
 まゝ其不分明なると、於て噂する徴候や證據ハ、何故に些  
 少の肝要なるとを爲ぬものぞ然し、其事に就てハ、何處に長

く説話がある、造物神が我等に占點を賦與させられ、  
 萬有の外の前表ハ、あり能ぬと云ふを、乃公が汝の口を閉  
 て肯て證をつとや  
 ○夫の幸福者も、人倫に造物神の前表や此性質の占點を  
 如何ぞしてキ、切離して、辨明し能ぬとハ、明にあらむド  
 や、イヤさうでハ、るいせよ、不思議の徴候は、由て人倫が好  
 事なると、則ち無理非道ならぬバ、らぬ、夫の人倫ハ、好事  
 を撰ひ習ふ、愚事ハ、カ所及避るると、十分も、の、方術  
 の信義の心と、打明の心と、グハ、るトや、夫の人倫ハ、只其心  
 の好いと、未と、就て、部屬する事を習へ、其人ハ、幸福な

あるであらう。萬有自ら常住坐卧。その人は造物神の善  
良なりや。聖智ありてや。神通自在なるその徴候を十分賦  
與せらるるよりらトヤ

○茲は尚過分ふことにて愚昧なる迷ひ信仰者より由り言  
れたる萬有の外の前表が徴候のわする事件と些少も一致  
せぬ不どき様は。イツモ馬鹿にして不十分なる事を附加  
へるトヤ。その時はハ諸事諸物。造物神の通り聖智は  
いて憐愍深き賢人の為はハ極々勝れて甚慥は疵つひて  
見ゆるであらう。カ我等もチツト純粹は思惟しやう。思  
惟する時ハ状態が此の如くあるトヤ。事件を為ふと思ふ所

の人ハ目的と標的とがあるトヤ。何故は夫の男がそれを  
為し其男ハ聖智あり才智ある人である時ハ其人ハイ  
ラモ賢智恵にて善良なる目的があり殊は非常な勤業が  
あるトヤ。人は於て此目的が誠である所のてハ殊は極く  
勝れるる意味は於てハ。トヲリサモ造物神であるトヤ。造物  
神と云ハ極く勝れるる才智で。極聖智であらせらるるト  
ヤ。ソコその動作をさせらるるトヤ。決して扁頗のトハさ  
せられぬトヤ。然しなぐらいテモ賢智恵にて善良なる目的  
うあらせられぬばらぬトヤ。造物神が或人倫や市街や  
全き人民は徴候を賦與させらるるトヤ。チツト定て見よ。然

時ハ此徴候ガ實ニ賢智目的ヤ良善ヲ標的ガあらねバ  
 ならざリ。カ人倫ニ於テその續の爲ニ様々徴候の賢  
 智目的ヤ良善ヲ標的ガ罪のある生計ニテハ實ニその人  
 占點ニ所のものである。ヤ去りのとなりむ實ニ元  
 來此ノ可りさる續でそれニ就テ已の躰を直をもと營ル  
 このハ既ニ汝ニ目撃しと通りトヤ此標的を届もて  
 人倫ニ於テハキツ極く劇しき災難の罹離ガ出來るトヤ  
 善良ニテ賢智ニ造物神ク近寄ところの災難や罪  
 や死や等の事ニ就テ人倫ニ前表ニ由テ占點しヤうと思  
 召てもあらうらバ其徴候ガまゝ満足ニあらねバなら

ねでもあらうらバまゝ様々近寄ところの災難等が明ら  
 告知せられねバならぬでもあらう事ヲ甚明クニ繼ト  
 や乃公ガ汝ニタツマ犬の聲ニ就テ話を時分ニ言通リ  
 災難ガ明クニして分明ニ知せられねバならぬでもあ  
 らう。まゝ災難ニ出合でもあらう諸人ガ其人でも他の  
 人ニても罹ぬとも欠りなく知得るやどき様々告知せら  
 れねバならぬ。サテ考へて見て所謂徴候の皆  
 を汝の心意ニ如何ニ言訊立らう。乃公ガ汝ニ願ふ事  
 ハ汝ガ徴候のある事件ト明らなるてや一致しとる。ト  
 類似する事件ト何處ニ見ざる。乃公ガ既ニ十分ニ

故に示しと通りよ。何處までもあるまいぞや  
 ○船は合圖や或は記標を知せやうと思ふされども、様  
 きたがその分明なると、唯推量するのことで全く現は能は  
 ざりしやど。不分明にして理會されぬ様は為ならんば、汝  
 がその船大将は就てハ、何と言でもあらう。當然と以て  
 言ハ此男ハまさしく馬鹿ものと名くるでもあらう。ナゼ  
 夫の大将が个様々式にて、己の目標を届までも出來  
 まし、混亂もするも、何言も言訳は立得ざりしもの  
 下やうら下や。サテ我等がこの事を前表は證據と取らう。  
 个様々不極定にして道理の暗き現ハ一事は信用するも

のハ主極しと賢人よハ。如何不どの恥辱であるまい。然  
 しなぐら乃公が汝は例を引て再度辨明さうと思ふ。これ  
 ハ實は諸人言尚よく記憶は横とらうてあらう所の一事  
 を言トや。乃公が光耀る空中の現象を目的トや。これハ十  
 八百五年の十月の二十三日は此國は見え、乃公が既  
 前方一口話しせし所の事トや。ガ思はる迷ひ信仰者ハそ  
 の現象は就てどう云思ひを為せしん。合戦や饑饉がある  
 と思ひしや。それハ何故であらう。此空中の火列差異  
 の運動まで一度ハ少ハ、劔は似たる柱の形は、立てま  
 へ一度ハ蛇や龍の形を現ハせしものトや。サテ此劔

の様を柱や合戦や龍や蛇や恐しき獸類や饑饉が現はれぬ  
 ぬバまらざりしと或人が思ふまはこれハ疫病の徴候  
 ドヤと思ひし何しし形もろい事を思ふものうまも他  
 人ハ當然にて此柱くら阿利祿の枝を出りしとでもあら  
 うソコ和睦の前表と出りしとでもあるまいク何しし  
 不都合なまも何しし馬鹿なまもその續まも或  
 ハその前表又信用もるこハ恥辱もあるでもあらうタツ  
 一マ名けと徴候や合戦や饑饉の現象の形もないとま目  
 撃するまも尚肝要もあるであらうカこの合戦の  
 些少の困窮を受ぬ我等が徴候を見て屢々の住人ハその

とる合戦の劔が恐しく人々も荒との中間は於て血の  
 出る徴候の一つとも見まんど然しつから徴候が事件の誠  
 らしき前表であるであらう時ハイツモ徴候のある事件  
 が。繼ねばならぬとが憶ふあるトヤこの事が只の一度も  
 欠る時ハそれが最早徴候でハまいッデコ此繼と云文字が  
 そこは徴候が見られ知るゝ屢もあらぬばるらぬぞや然  
 しこれで十分トヤ  
 ○我等がまど汝の話の冠帽で産と夢と夢を見とととが  
 格段ニハ如何ニ拘るクを見せやうぞヤ  
 ○汝の朋友の母親で出来と通りの事件ハ何れも不思議

なとでいまい、個様の事件ハ此彼に於て度々あるトや、殊  
 二夜分ニ夢ニ似たる強き想像カニ由て、單暗處ニ甚容易  
 く起さるゝ所のものトや、此母親ガ深夜ニ於て眠りつゝ、  
 己の奥様の死の事を忍て、さ様な面像うら度々聞所で恐  
 くハ脇の部屋の方ニ行と、至極容易く思ふのトや、然る時  
 實ニ奥様が此病ニ死れて人々ガ誠らしくその死骸を脇  
 の部屋ニ置とてもあらう、此事を考へる所で、その母親ガ  
 見あげて見て、鏡ガ朧なる光りを與へて、此彼その上ニ落  
 る光輝の反射ニ由て考へて、其想像の中ニ秘密ニもる所  
 の事ト、その奥様の死骸ガそこニ棺ト共ニ鏡の下ニ置れ

とるを見とトや、まゝ覺寤る所の事が騒しくわらぬ時ニ  
 ハ、極容易く出来る所の覺寤の中ニ眠るても、甚能あるト  
 や、ソコ夫の母親ガ脇の部屋ニ行と共ニ其全き面像を  
 夢見と不どさ様ニわつと、ソコタ其脇の部屋ニわつて、假  
 令其寢室ウラ起上らるんど、ハ雖も其面像を見とて、ガ  
 眞實のトとせ、不ど明クニわつとのトや、乃公ガ此講釋  
 を始し、時分ニ、个様なる態を重き夢ニ就て、汝ニ話ト通  
 り、眞實の事件を為とり見とりもるゝ實ニ信用する个  
 様ニ強き想像を、残も所の夢であるトや、まゝ我等ガ簡略  
 ニ夢ニ就て話まであらう、時事件ガ詳しくするであらう

ものトヤ  
 ○所謂冠帽て産する人倫ハ何事が拘るクそれ又就  
 てハ想像より他ハ何モわらぬトを汝又稍明クモ為  
 たららでハ多く言ハハ冠帽と云ものハ總ての孩児  
 の産する時ニ備つたる薄き膜より他のものでハな  
 常ニハ既ニ孩児ガ腹を出る前ニ破壊れてあるトヤ然  
 ながら稀ニ状態ニ於テハ完全ク或ハ一部分ニ孩児  
 を覆ク顔を覆クのとガあるトヤ大凡卵ニ生るハ  
 生る物ノ體生云人倫や馬牛ノ類ハ體生ヨシ脱  
 冬時ハ胎兒を産し此膜を覆ひ産するにありて異  
 胎兒を産し此膜を覆ひ産するにありて異

此現象の天然自然ニ現ハル由テ臆按を來モトヤ  
 其事が肝要ニまいるれば産婆ガその事ニ就テ全クハ言  
 ハヤサメトヤ然しそれが反對の事であるトヤ然るニ此  
 事ガ速ニ信仰者ノ為ニ養餌であるトヤ人々ガ驚駭テ愚  
 なる産婆ガ其道路ニ話スるトヤその産婆ノまハ他  
 の現在ニある速ニ信仰者無智文盲なる婦人等ガ此不  
 除くトヤ何モ出来ぬトヤ此事ガ肝要ニあれハ  
 來る時ハ産科醫師ガそれを除キ或ハ所謂産婆ガそれ  
 云テ孩児の産するを知りト一様方事が術者ノ手ニ由  
 下る孩児の産するを知りト一様方事が術者ノ手ニ由  
 此現象の天然自然ニ現ハル由テ臆按を來モトヤ  
 其事が肝要ニまいるれば産婆ガその事ニ就テ全クハ言  
 ハヤサメトヤ然しそれが反對の事であるトヤ然るニ此  
 事ガ速ニ信仰者ノ為ニ養餌であるトヤ人々ガ驚駭テ愚  
 なる産婆ガ其道路ニ話スるトヤその産婆ノまハ他  
 の現在ニある速ニ信仰者無智文盲なる婦人等ガ此不



成人の孩児も己の生計ハ些少安穩ニあるであらう。まどい呼をまどや尚心悪くハ何があるヲト云バ時としてハ産婆の介様なる種類ニ就て迷ひ信仰ダ其膜を以てまど術をなし或ハ其膜を迷ひ信仰者ニ賣うと思ふ所て船入や展帆仲間ニモコハ利益ニあつて介様を事件を其児ニ隠し誑さ様ニまどむつと。同様を迷ひ信仰の家族ニ於て其事が出来たとを見現ハさるれば。その時ハ児が層見日現ハれてあるトや段々成長するニ於てその産る時冠帽とてガ男子ヨも女子ヨも謹んで語るトヤサテ此者ガ惑ひの中ニ娼役ど所て事を見透るト威

カがあると思ひて功者なる學者ニ由て臆按ニ就ても愚智なる想像の作用ニ就ても教へられりて始終苦痛ニして困迫ひ考へも以て穢りされてあるトや。夫の者共ダ此事を始ハ夢ニ由てみし其次ハ覺寤てさへも周章する想像ニ由てなす諸般の見えや葬禮を見るてまどトや。葬禮を見る威カハサテ一ツハ死る状態を以て現ハれ。殊ニ此者ニ歸しハ死る状態を見と乃公ダ此まどハ冠帽て産む者ガ既ニ久しく葬禮を見と。乃公ダ此時節にて此人倫の想像ガどれだけまで行ふ。格段を威カを持て自ら如何ニ思ひ思ハム。故ニ語さうと思ふ

○多く學問があつて法術は不分別もあらぬ乃公の  
 朋友の中の一入の男がその言を以て見れば亦冠帽で産  
 と男であつたと假令乃公がその人と始終その事を以て若  
 るとハ雖もこの男が決して前表は類似するを言態  
 ハあらぬと然しむから我等が掘端を行とき責道具が  
 出してあつてその男がちやうど其責道具は掘づくそが  
 出来とサテ此男が實は乃公に向て言ひハ茲はハ事が  
 出来ぬハならぬ吾が眼のあとりは物は掘づくハナセバ  
 び覽トよ土地も何はもるくそこは石も方くまは吾を  
 突るものもるうつうらトヤト云ハコデ乃公がその顔

を朝弄しとのトヤ然しそては何はも出来ぬと其後一  
 年もしてうらその責道具のあはと軍卒の屯所の仮  
 小屋が建られとコデこの男が其事を聞とそは乃公は  
 伺候して言ひハ吾が何はも言ふんと今見て見よ  
 吾が日外ぞや掘づくはと處のそこは今この仮屋が建ぞ  
 や夫の男が掘端は家の脇の方はあは責道具は掘づく  
 その責道具の中央は於て仮屋が建られとそをよき氣を  
 付て見て乃公が夫の男は答へて言ひハ視るもの見え  
 が家建るとや壁塗はよまご届くならバ夫の男が屢く掘  
 づかねハあらぬでもあらう時は夫の男ともは城下

を越て行く時ハ乃公が危き事と見るトヤ。なご、言と  
 サテそれが學問一とのさう。稍器用な男であつた。然し  
 母の感下込ダ。何れもなほ處の躰づきを見込としてその  
 辨明一とるその現象は一年も後ハ軍卒の飯屋の屋建が  
 ありしを言し不どさ程まで強くなつた。サテ今様も不  
 都合な想像が全く不學無術の人倫に於てハ何事を為ぬ  
 云不都合な牲を備へまい。此輩ハ或目的に於てハ  
 中言語をも人と同様なあるトヤ。此人ハ已に不思議な力

を持つ想像で、それと就ての諸般の層見の道理を己れ自  
 ら證充とつて、まゝ其事を他人に信用せしむるを學ぶ  
 トヤ。此想像は由て實は甚安うらぬ生計があるものトヤ  
 ○汝の迷ひ信仰の朋友が話しせし夢ハ何事か拘はる  
 う。此夢ハまゝ如何様も不都合なありえやう。然し  
 ら實は始終我等に於て動作である。想像力の天然自然の  
 現象であるトヤ。然しその動作ハ始は深睡が減むる時記  
 臆止つて。眠が脆微なる時。それだけ強き想像を為と  
 き又あるものトヤ。ナゼバ我等が深睡中ななき我等の自  
 らの知覺力が交換するトヤ。イテモ我等に於ての考按

カヤ種々の性質の現象を前方既知と種々の事を集めて  
 心は現はもその為は動作である此想像力ハ時としてハ  
 想像は由て前方定られとて我等の心は観むる通りハ  
 一様は明くはるる程天然自然にして規則立てあるト  
 や然しみるがらそこは區別をさる道理があらぬトや我等  
 が此事と彼事とに於て陰影を眞實の事として我等の記  
 憶は夢と眞實の事とが出来と問は區別を定め能はぬト  
 やト覚寤と態くら區別されと夢を見分て我等が精神  
 の現はれと事と幽霊を見と事と或ハ眞實の事とをなす  
 と見分と事と我等ハ正體もる現ハる事があるトや

我等が第一回の講釋は於て其例を引て知せと通りトや  
 然しなうら多分ハ規則なくして紛紊てあつて甚容易く  
 夢と知もるトがあるトや此皆の事を以て夢の中の此作  
 用ハ覺寤と態は於て何れも他のとてあらぬ唯覺寤と  
 時ハ我等の精神が我等がある處の場處を知て我等の周  
 圍を圍繞ところの物體の感覺と規則正しき記憶や順  
 序や系累を覺ゆるそのそこは差別があるバウリトや此  
 事ハチヨト思ひて見れば汝ハ恐く不思議は現ハる  
 てあらう然しみるがら些少バウリ工夫もれば明くはなる  
 てあらうモコハ口汝ハチヨト淋しき處は坐て居て或場

處又出來との状態又考へて見よ。その時ハその状態  
 と一致してその他の考へも。汝又精神又現ハるゝもの  
 現ハれぬもの。長くハ續ぬであらう。ソレ全く他の家  
 あるであらう。瞬間又汝がその場處をバ想像て。まごその  
 場處又汝が他の國處や他の現象や他の人や等又復系累  
 がある事件を見る。トヤ此の如くして進む所て。汝が此  
 件と彼事件とを紛紊して。一二密扭篤の中又種々の事件  
 種々の場處又わつて。種々を摸様のある人を考へる。ト  
 や。ソレ汝が我等の覺寤と状態又於て考へる。ト。夢又於  
 てハ一様又順序なく。不思議又互ひ又紛紊る。トを見る。ト

や我等が實又夢と我等又定る。その事件の皆と共。我等  
 の開とる眼や我等の感覺や。まご眠。於てハ作用の外  
 ある。我等の他の精神又我等の才智として。同場處又止つ  
 と。とと證左ど。ぬまら。バ。現在又あると思ハる。てもあ  
 らう。まごその他。ハ何事がある。クと云。バ。心の活潑なる  
 感覺が。想像の感覺と全く麻酔て。幻忘なりて。眠の中。ハ  
 ちやうど反對の。と。か。あ。る。ら。ト。や。ナ。ゼ。バ。そ。こ。ハ。外。面。の  
 心の感覺が。あ。ら。ぬ。ら。ト。や。そ。れ。が。為。ニ。想。像。の。感。覺。が。ち  
 やうど其通り。又活潑なる。と。が。あ。り。て。實。又。五。神。又。由。て。知  
 れて。我等自ら。が。現。在。又。あ。り。ら。の。様。又。現。ハ。る。ト。や。こ

れハ何が夢と出クモクのものとしてあるトヤ。まゝそれと就て  
 夢に於ての記憶ハ規則正しく作用ぬと云ふがあるトヤ。  
 ナレバ我等が甚屢く既ニ前方死とを憶ニ知る人と物  
 もるをを見るくらトヤ。ツデゴ夢と云ふものハ極天然自然の  
 ものでわり覺寤とる状態ニ於ての我等の考への威力の  
 作用と同様なものトヤ。サテ我等が論トと通りニ我等の  
 尋常の想像カバウリありて此覺寤と時作用ヤウニバリ  
 リ進む个様の事件ウラ孰ガ積リ得るウ。乃公ガ言する  
 けの出来ベキとて。そこウラキトツ前表を孰ガ積リ得る  
 ク。まさしく如何ニ考へても適當の基本ニ安ざる所の者

一人てもあるウ。夢リまゝ如何ニ不思議ニ如何ニ心悪  
 く如何ニ困迫クあり得ヤウウ。我等の精神の休息ガ寡ク  
 して。記憶ガ己の作用を始る自己の知覺カガ復故とき真  
 實ニ精神ニ現ハる。想像カの遊の天然自然の續である  
 トヤ  
 トイン 且那尊主ガ私ニ教へて下さる此辨解ハ皆私ハ自  
 ら十分ニ得道いさしましとト申さねバなりません。私  
 ハ追從申そでハござりませぬども。まゝアノ迷ひ信仰ヲ  
 取付れましと。他の人ニ話しまそでもござりませう。そ  
 の人として此馬鹿なとトヤの此想像の皆を以て頭ウラ

壓挫ぐでもござりまーやうー且又萬有の外のとハ何  
 も此世界は於てありハ能ハぬとを自ら又證左とつるで  
 もござりませうと思ひまも私ガ尊主の教へとよく氣と  
 付て覺えまーして私ハ尚多分の力と以て總ての迷ひ信仰  
 と防ぐ為と詳しく學びまもてござりませう然らば  
 私ガ部屋又歸りまも前まもど夢の事又就てらつとば  
 りの存寄と言いて下され想像カガ始終我等又於て作用  
 と見もる者でござりまもれば何故又夜分ハ人々毎ガ  
 夢と見ませぬとガござりませう  
 且那 深睡中又於ての心の威力ガ縮閉であるとガ明り

して通常の夢にて何でも思ふ所の皆のてハ感通されぬ  
 ものトヤ故にモ口人々ガ走ふと思ふても走れ  
 りセ人々ガ立ち思ふても立れぬ人々ガこゝは  
 行ふと思ふてもそこは止りて寢室中又同場處又横ハ  
 るまどガあや心の作用ど一ま一格段の考へをその考へ  
 る事件又定められ能ハぬものトヤ故に格段ある考へを  
 我等の想像又定るとなく其事うら一ツも記憶ガ残らぬと  
 ガ明り又あるトヤソコ深睡の間想像の定りりら一ツも記  
 憶をもとぬとガ繼トヤ然らば強く夢見る人又於て  
 話しむやの運動トヤの由て明りなる所のてを心ガ些  
 少の威力を行ひ得るとその終既又想像の局定事の上  
 カ強く作用て多分又局定とての記憶を保つトヤ乃公ガ

多分よト言トヤ、ナゼト人倫がまゝの時としてハ夢に於て甚強く話し號呼で分明な理會をづく話もくらトヤ然し、まがら其實義なる辨明は依バ目寤てあつて、どう考へても何はも知ぬものトヤ、此事が我等は深睡中の夢に就て、何はも感通がなく、それが為はまゝ一ツも記憶があらぬを教へるトヤ、所謂の髣髴として記憶が作用する个様な眠りの中は出来る所の事バツリを思ひごそくらトヤ

「トイン 眞實ありがとうござりませ、且那尊主が私を教へて下さつと所の事を、私ハ随分得道いゝまゝ」と私を諸

方々ら圍繞物件や事件を明くは為うと思ふて、尊主がご心配と下されとのにまらぬ、尊主がまゝと私の心と安静にして、迷ひ信仰が行住坐臥窘困し所の始終恐れて氣味悪ひまら免さして下さつと

且那才人の番頭よ、乃公が實は汝はそれだけを論ト聞せとまらバ、汝の肝要なまでの乃公の目的は、達は乃公がまゝと萬有學の其他の學問は、まてこれを以て存ト立せ得ぬ、諸人の肝要なまでの目的は、達は造物神が汝トヤの人の倫の諸人は、其造物の不思議を思惟て考ふるその為は、理非正しき仁義禮智の心を賦與させられと、まゝ一個の鏡



の中は其善良なるや聖智あるや神通力あるや官職  
 のあるをを觀する所の為にも仁義禮智と賦與せられ  
 とまご已自らの想像にて不思議を造る所の為にも不  
 思議と前見をもる人ハ己の賢智なる造物者と辱しめて已  
 の固有の仁義の心を外聞悪くするものドヤ

民間格致問答卷之六 大尾

大坂天満難波橋筋

鳥屋文兵衛板元

元治二乙丑初春新篔

書

京都御幸町御池下

菱屋孫兵衛

江都日本橋通壹丁目

須原屋茂兵衛

同

二丁目

山城屋佐兵衛

勢州洞津

山形屋傳左門

備中倉鋪

大坂屋源助

林

尾州名古屋

永樂屋東四郎

肥前佐賀

原口吉二

賣私所

大慈寺橋通北太郎町

河内屋喜兵衛

